**「スワーミー・ブラフマーナンダ**

**―その生涯と教え」**

**2023年2月19日**

**逗子例会　午前**

**スワーミー・ディッヴィヤーナターナンダによる講話**

**於・逗子協会**

シュリー・ラーマクリシュナの弟子で、偉大な預言者であるスワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、世界中にシュリー・ラーマクリシュナの生きる力を与えるメッセージを発信するための重要な役割を果たしました。彼はアドヴァイタ・ヴェーダーンタを人類に広めるためにやってきたのです。のちにポートランドのヴェーダーンタ協会代表となったホーリー・マザーの弟子スワーミー・アセーシャーナンダは、「スワーミー・ヴィヴェーカーナンは、主キリストが『あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる』（マタイによる福音書16.18）と言われた、聖ペテロに匹敵する」と述べました。一方、スワーミー・ブラフマーナンダは愛の宗教：バクティを私たちの世界に広めるためにやってきました。

シュリー・ラーマクリシュナは母なる神に「お母さん、どうか私に、神を心から愛する子供をください。私は昼も夜も世俗的な人々と話すのにうんざりしています」と祈りました。その後のある日、シュリー・ラーマクリシュナは、母なる神が小さな赤ちゃんを自分の膝の上に置くというヴィジョンを見ました。ずいぶん経って、初めてラカル(スワーミー・ブラフマーナンダの僧侶になる前の名前)を見たとき、シュリー・ラーマクリシュナはその少年がヴィジョンで見た子供と同一人物だとすぐに分かりました。ラカルはシュリー・ラーマクリシュナに対して、本当の子供のように振る舞いました。突然、どこからか走ってきて、シュリー・ラーマクリシュナの膝の上に飛び乗ったりもしました。シュリー・ラーマクリシュナもラカルを自分の子供のように見ていました。何かでラカルが少し体調を崩すと、師はとても心配して、信者に「どうしたらいいだろう」と訴えました。

シュリー・ラーマクリシュナは、すべての人の内側を見通しました。そして「ラカルは王国を運営できるのだよ」と言ったこともあります。これを聞いていたスワーミージーは兄弟たちに「ラカルをラージャと呼ぶことにしよう」といったので、後に一般的に「ラージャ・マハーラージ」と呼ばれるようになりました。スワーミージーは生前、ラーマクリシュナ・ミッション設立後、そのリーダーシップをラカル・マハーラージ（以降マハーラージ）に引き渡しました。そしてマハーラージは最後の日までラーマクリシュナ僧団の活動を形になさいました。

スワーミージーはガンジス川の近くに土地を購入したいと思い、その責務をマハーラージに託しました。それは簡単な仕事ではありませんでしたが、マハーラージはご自身をその仕事に捧げました。

現在のベルル・マトは、購入前に多くの法的煩雑さがあったので、マハーラージはこれらの案件を解決するために、法律家や弁護士に相談しなければなりませんでした。毎朝、軽い朝食を摂ったあと、マハーラージは法律家や他の知者たちに相談するためにコルカタへ行き、帰りが遅くなることも頻繁にありました。ときどき昼食に非常に遅れて食事抜きとなり、空腹のままでいることもありました。しかし、マハーラージがそのことに不満を言うのを見た者は誰もいませんでした。マハーラージはただ兄弟僧スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのためだけに、これらの全てを楽しそうに担いました。最終的に土地を得て、法的煩雑さが解決したとき、スワーミージーや他の兄弟弟子たちはとても喜びました。

マハーラージが関わらなければならなかったもう一つの非常に困難で骨の折れる仕事は、バリー自治体と訴訟で戦うことでした。自治体は、ベルル・マトを［僧院ではなく］ガーデンハウスとみなして税金を課したのです。最終的にはベルル・マトがその訴訟に勝ちましたが、それには一年を要しました。建物の建築、土地の取得、建設に関連する工事の世話、会計管理などは、マハーラージの性質とは真逆のものでしたが、スワーミージーと兄弟僧侶のためだけに、マハーラージはこのような仕事の責任を負ったのです。

マハーラージは、スワーミージーが提唱した僧団に関する考えに疑問を呈することは一切なく、むしろスワーミージーの考えに完全に共感していました。スワーミージーもマハーラージをとても信頼していたので、ある時こう言いました「他の兄弟弟子は全員私のもとを離れるかもしれないが、マハーラージだけは決してそうしないだろう」。ラーマクリシュナ僧団の礎となっているのは、この信頼と忠誠心です。

マハーラージは、神を悟るために家庭生活や家を捨てた見習い僧や僧侶たちに、常に愛情のこもった気遣いを見せました。マハーラージは彼らが定期的に霊的な実践をしているかどうかだけでなく、彼らが栄養価の富む食べ物を食べているかどうかにまで気を配っていました。当時は資金が不足していたので、僧侶たちの食料はたいてい十分とは言えませんでした。ベンガルでは、魚が主食でした。タンパク質を取るのに魚はいいです。ある時、信者が大量の魚を持ってきました。魚が調理されると、マハーラージは「見習い僧や僧侶たちにたくさん出してください」頼みました。しかし、ある菜食主義のスワーミーは僧侶が魚を摂るのを好まず、魚が食卓に出されることに批判的でした。その日も同じことが起こりました。このことを知ったマハーラージは非常に厳格になって「ここはヴィシュヌ派の僧院ではないのだから、僧侶が魚を食べることをとやかく言わないでください」と言いました。

マハーラージは小さな行為にも完璧さを重んじました。なぜなら、その人がどのように小さな行為をするかで、その人の人格が判断できるからです。つまり、働くときと瞑想するときの心は、同じ心なのです。私たちが毎日の仕事を場当たり的にしていれば、私たちの瞑想は深まらず、規則的にもならないでしょう。マハーラージは、見習い僧が内面の生活を築くことを熱望していました。彼は、困難で面倒な仕事に対して間違いを犯した者がいても気にしませんでしたが、誰かが些細でそれほど重要ではない仕事を不注意にするようであれば、非常に気になさいました。例えば、花を摘むときに、不注意にも枝の一部も切ってしまったら、マハーラージは見習い僧から職務をとりあげたほどです。ある日、彼は見習い僧と若い僧侶たちにそれぞれ一個ずつジャガイモの皮をむくように言いました。そして「皮をむいたジャガイモを見て、君たちがどれだけよく瞑想しているかを教えてあげよう」と言いました。皮をむいたジャガイモの中から、ある僧侶(スワーミー・シュッダーナンダ)がむいたジャガイモを指して「これはよく瞑想している者がむいたものです」と言いました。

マハーラージはジャパ・瞑想を規則正しく行うことを強調しました。と言うのは、ジャパ・瞑想をしなければ、僧侶としての生活は無味乾燥になるからです。さらに、仕事と共に瞑想をしなければ、怒り、貪欲などの低い欲望をコントロールすることはできなくなります。また、規則正しく瞑想をしなければ、仕事はヨーガにはならず、結果として自分のエゴを増やし、霊的求道者を堕落させます。ベルル・マトに滞在中、マハーラージは午前4時までに見習い僧を起こしました。数時間瞑想した後には、礼拝の歌と賛歌の詠唱が続きました。［マハーラージと共に行う］規則正しい霊的実践のおかげで、彼らの心がより高いレベルに引き上げられる雰囲気が、すぐに作り出されました。マハーラージは見習い僧や他の僧侶が瞑想に深く飛び込むように力づけたのです。

霊的な組織では、霊性が低下するとメンバー間の意見の違いが大きくなり、亀裂が入ります。このことはメンバーが霊的実践を熱心に行っていない場合に起こる可能性があります。これからその分かりやすい例を挙げます。「人の中のシヴァ神に仕えよ」、というスワーミージーの高らかな呼びかけに鼓舞された若い男性たちが、病人を自分たちで看護し始めました。このようにして、ベナレスのホーム・オブ・サービス（奉仕の家）が誕生したのです。彼らは他者に奉仕することを重視し、ジャパ［マントラを繰り返し唱える］、ディヤーナ（瞑想）、スワディヤーヤ(聖典の勉強)は個人の裁量に任されていました。ある時、ベナレスのセヴァアシュラマ(奉仕の家)の奉仕者の間で意見の相違がありました。スワーミー・サーラダーナンダとスワーミー・トゥリーヤーナンダは最善を尽くしましたが、その問題を解決することができませんでした。彼らはマハーラージに、ベナレスに来て問題を解決するのを手伝ってくれるように頼みました。驚いたことに、マハーラージはベナレスに来ても、意見がぶつかり合っている当事者を話し合いのために呼び出すこともせず、ただ皆に、毎日マハーラージご自身と共に瞑想をするように、とだけ言いました。全員がマハーラージと一緒に瞑想をするようになると、数日で状況は変わりました。彼らは不和の原因を理解し、自分たちでそれを解決しました。彼らの中には、僧侶にはならず在家のまま奉仕をしたい、と思っている者もいましたが、その時にマハーラージから出家をさせてもらいました。

マハーラージが僧団長だった時期に、彼は南インドへの長い旅に出ました。彼はそこで霊性の求道者たちをイニシエートしました。多くの新しいセンターも僧院の支部となり、僧院の活動の拡大とシュリー・ラーマクリシュナのメッセージの普及を助けました。マハーラージが僧団長として在任中、多くの新しいアシュラムがインドのさまざまな地域でラーマクリシュナ・ミッションに所属しました。マハーラージは、新しく建設するアシュラムの成長と発展のために、広い土地を購入してそこを植物や花で埋め尽くすことを強調しました。彼はインドのある地域から植物を持ってきては別の地域に植えました。これにより、異文化交流への道が開かれました。彼はバンガロールからベルル・マトにナガリンガムの種を持ってきました。 カンカル・アシュラムは甘いマンゴーで有名ですが、それはマハーラージの努力の結果です。それまでカンカルには良いマンゴーの木がなかったので、インドの他の地域からそれらを持ってきて、ご自身が熱心にそこに植えました。同様に、彼はダッカ(バングラデシュ)からベルル・マトに、ある種類のジャックフルーツを持ってきました。マハーラージは、アシュラムの近くに住む信者たちに、アシュラムの発展を助けるように励ますこともありました。

南インドへの訪問中に、マハーラージは「ラームナーム」というサンキールタン［旋律をつけて神の御名を唱える］を聞きました。彼は非常に感銘を受けたので、これをベルル・マトで紹介し、僧侶や見習い僧にも歌うように勧めました。ゆっくりとそれはインドの他の支部でも唱えられるように広まり、現在でも、インドのほぼすべての支部でエカーダシーの日［満月と新月から11日目］に歌われています。

このように、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが講義で言ったことをスワーミー・ブラフマーナンダが、現実化し、具体的な形になるようにしたのです。彼はスワーミージーが夢見ていた僧院のアイデアを強固なものにするよう尽力なさいました。

ある年配の僧侶が彼のところに来て、僧院にいくつかの新しい規則を追加したい、と言ったことがあります。すぐにマハーラージは「新しい規則を追加するよりも、もっと愛を増やしてください。なぜなら、僧団のメンバーを結びつけるのは愛だからです」と言いました。

マハーラージは22年間もの長きにわたって僧院長を務めました。彼はこれまでで最長の僧院長です。

マハーラージの兄弟弟子たちは彼の判断を非常に信頼していたので、スワーミー・サーラダーナンダはかつて「君たちは論理と推論をして、ある事柄に関する私たちの決定を判断するかもしれません。しかしマハーラージの決定は絶対に判断しないでください。なぜなら、マハーラージはシュリー・ラーマクリシュナと常に交流しているので、彼のすべての決定はシュリー・ラーマクリシュナから直接来たものだからです」と言いました。

マハーラージがシュリー・ラーマクリシュナの教えをまとめた『Words of the Master　(師の言葉)』という本を出版したときのことです。シュリー・ラーマクリシュナがある日、彼の前に現れ、「この部分の教えは私が言ったものではないよ」と訂正したこともあります。

悟った魂の心は大きく拡大するので、その人は他者の幸福に幸せを見いだします。実際、小さな「私」が大きな「私」に溶け込むとき、人は他者の福祉のために生きたいと願います。マハーラージの付き人の中に、手に負えない者がいました。ベルル・マトの偉い人たちは、彼をベルル・マトから追い出すことに決めました。その時のセクレタリーはスワーミー・サーラダーナンダでした。彼らの決定を聞いたマハーラージはサーラダーナンダジーのところへ行って言いました「君たち全員が○○をベルル・マトから追い出すことに決めたと聞いたよ。私は僧団長職をやめて、どこかで彼と住むことに決めました。私が引き受けた者を去らせるくらいなら、私が僧団を去ります」。これを聞いたスワーミー・サーラダーナンダはすぐに決定を撤回しました。

マハーラージはまた、堕落した人の救い主でもありました。人は生きるために非道徳な職業を選ぶことを余儀なくされることがあります。しかし、彼らの心はその苦しい状況から抜け出すために叫び、そこから救い出してくれる誰かを探します。舞台女優タラスンダリの身に起こったことは、このことを証明しています：

「私の心に平安はありませんでした。たったひとりで平安を求めてあちらこちらに巡礼に行きましたが、私の心は煮えたぎっていました。ある日、私はビノディーニと共にスワーミー・ブラフマーナンダジーに会いに行きました。彼は愛情深い父親のように、たくさんの愛と思いやりを持って私たちを受け入れ、私たち二人に関心を示してくれました。昼時でしたので、彼は私たちのために食事を手配してくださいました。彼は『もっと頻繁にここに来てはどうかね？』と尋ねました。私は、『恥ずかしくて、恐ろしくて、そんなことはできません。私たちは女優なので世間から見下げられていますから』と答えました」(当時、女優は売春婦出身だった)　「マハーラージは私たちの心からすべての恐れとためらいを取り除いておっしゃいました『ここはタクールの場所です。タクールがこの世にあらわれたのは、特に落ちた人を救いあげるためです』。数日後、マハーラージは私が出演した劇『ラーマヌージャ』を見に来られました。マハーラージは私を祝福してくださいました。それからマハーラージがブバネシュワルに滞在していたとき、私もたまたまプリを訪れていました。彼がブバネシュワルにおられることを知って、会いに行きました。彼は私に会ったことをお喜びになり、毎日そこで食事をするようにおっしゃいました。私は『彼』の中に、愛情深い父親を見ました。なぜなら、この世では、誰もが通常、私利私欲に支配されているからです。マハーラージは、私の心の状態を判断しながら、『タクールの名を繰り返し唱えるように』と忠告してくださり、『私も若い頃には心が落ち着かなかったものだよ。主の御名を繰り返せば、心が穏やかになるのだよ』とご自身の経験を詳しく話してくださいました。私はマハーラージの言葉に安らぎを見出し、私の心の煮えた切った感情は取り払われました。そして私は、彼のおっしゃるとおりにしよう、と決心しました」。

マハーラージは、真の愛と心を込めて彼に仕えたいと願う人々を無視することができませんでした。ある日、バシシュワール・センはビシュヌプルから大きな魚を持ってきました。しかし厨房係は「これはいりません、どこかへ持って行ってください。別の信者さんが大量の魚をくれたので、それを給仕してしまったんです」と言いました。当たり前のことですが、センは自分の努力が無駄になったのでしょんぼりしました。それでも、彼はマハーラージのもとへ行きました。マハーラージは彼を見ると「ボシ、君はビシュヌプルから私に何を持ってきてくれたのだね？」と尋ねました。ボシは、「マハーラージ、大きな魚を持ってきましたが、それは要らないと言われました」と言いました。これを聞くとマハーラージは台所に行き、厨房係に「その魚を洗って調理して、私に持ってきておくれ」と言いました。

これらは、マハーラージの生涯の逸話のほんの一部です。これらは彼の内なる人生がどれほど深く、彼の心がどれほど広かったかを示しています。バガヴァッド・ギーターには次の一節があります。

*サルヴァ・ブータ・スタム　アートマーナム　サルヴァ・ブーターニ　チャートマニ/*

*イークシャテー　ヨーガ・ユクタートマー　サルヴァットラ　サマ・ダルシャナハ//*

*本当に真理を覚り、あらゆるものを同等に視るヨーギーは、万物の中に自己（アートマ）を見、自己（アートマ）の中に万物を見る。6.22*

スワーミー・ブラフマーナンダの生涯は、この節の証明です。彼は特に、ラーマクリシュナ僧団の僧侶の内面を築くためにご自身を捧げました。なぜなら彼らはシュリー・ラーマクリシュナの解脱のためのメッセージを世界のさまざまな地域に届けなければならないからです。マハーラージは信者の心に信仰心を吹き込み、彼らが霊的生活の中で前進できるようにしました。彼はまさにシュリー・ラーマクリシュナの「マナサ・プトラ」(霊性の息子)だったのです。